

蛋白尿性網膜炎ノ一例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38620

分娩ニ至ル間ノ諸障害ヲ未然ニ防クカ至當カト信シマス、彼ノ穿刺法ノ如キ簡單ニシテ容易ナリトテ一モ二モナク試ムル様ノ如キハ輕々ノ至リデ例者腫瘍ノ種類ニヨリ皮様囊腫ノ如キハ其内容漏洩ノ爲ニ發炎化膿等起シ易ク時ナラヌ腹膜炎ナド惹キ起シテ母兒共ニ不幸ノ轉機ニ陥ル、事ガアリマス故ニ極メテ謹ムベキ事ト存シマス、

餘リ長クナリマスカラ之ニテ擱キマスガ終ニ臨ンデ一言申上テ置キマス、最初吾人ハ其右側ヨリ發生シタル囊腫ヲ全ク副卵巢囊腫ト思ヒマシタ、單房ニシテ菲薄ナル壁ノ血管ニ乏シキ内容ノ殆ンド水様稀薄ナル、實ニ其疑ヲ生セシメタルニ係ラズ、鏡檢スルニ及ヒ各部分ヨリ幾多ノ標本ヲ作りシト雖、其内面ニ氈毛上皮ヲ認ムルコトナク且ツ副卵巢囊腫ニ罕ナル乳嘴ノ發生マデモアリシヲ以テ副卵巢囊腫トノ診斷的根據モ甚ダ信シ難クナリ、或ハ又第三卵巢ト看做スベキ組織ヨリ發生シタル囊腫ナラザルカトノ疑ヲ更ニ置キ、本報告ノ始ニ當リ第三卵巢ヨリ發生シタル囊腫デハナイカト斷ツタ次第デアリマス、

尙本報告ヲナスニ就キ恩師小川先生並ニ畏兄小西病理講師ノ懇篤ナル御指導ヲ謹ンデ報謝致シマス、

○蛋白質尿性網膜炎ノ一例

醫科第四年生 朝倉重敏

(澤金)

予曩ニ本會講話例會ニ於テ同窓中島誠君ニ代リ患者ノ供覽ト共ニ口演シ會員諸彦ノ清聽ヲ忝フセリ本回小原芳雄君ノ勸メニヨリ再ヒ誌上ニ諸君ト相見ルニ至レリ一讀ノ榮ヲ得バ幸甚雖然其ノ症狀等ニ至リテハ賢明ナル諸君ノ既ニ既ニ知ラル、處タリ然ルニ此處ニ贅スル所以ノモノハ賣物ニ花ノ俗諺モアレバトノ野生ガ婆心ニ外ナラサルナリ

症狀 本病ハ蛋白尿病ニ續發スルモノニシテ同時ニ兩眼ヲ侵シ一眼ニ來ルコト罕レナリ檢眼上乳頭著シク充血シ且ツ混濁ヲ呈ス靜脈ハ稍々怒張迂回スルモ動脈ハ却リテ狹少ス混濁ハ暫時ニシテ濃厚トナリ其表面ニハ圓形若シクハ線狀血斑ヲ有シ同時ニ白色ノ班点ヲ現出ス白斑ハ一種ノ光澤ヲ放チ其ノ形ハ圓形又ハ橢圓形ヲ呈シ大サ一様ナラズ小ナルハ帽針頭大ヨリ大ニシテハ指頭大以上ノモノアリ所在スル處ハ乳頭ヨリ少シク距リ増加スルニ至リテハ乳頭ノ近傍恰モ白布ヲ敷クガ如ク一面ニ白色ヲ呈シ僅カニ健全部ヲ見ルノミ

黃斑部ニ於テハ星芒狀ノ混濁アリ黃点自己ハ周圍反對色ニヨリテ暗赤色ヲ呈ス此ノ黃斑部ノ星狀ノ變化ハ殆ンド本病ニ特有ナリトス

視力障害ハ檢眼の所見ト大ニ齟齬スルコトアリ中心視力ハ多少減弱スルモ全ク失明スルコト殆ンドナシ網膜剝離ヲ起サルキハ視野并色力ニ變化ヲ呈セズ

梅毒性網膜炎ニシテ蛋白尿性ノモノニ彷彿タル徵候(黃斑ノ菊花狀班紋)ヲ呈スルコトアリ檢尿ヲ怠タル可カラズト

源因經過豫後 總テ蛋白尿ヲ起ス所ノ腎臟病ハ其疾病ノ何タルヲ問ハス皆網膜炎ヲ合併シ得

ベシト雖モ最モ屢々之レヲ發スルモノハ萎縮腎ナリ蓋シ腎臟病ト網膜炎トノ關係ハ血液中心ニ混スル異常成分ニ由テ網膜血管ノ壁質ヲ變化シ以テ網膜ノ炎症及ビ脂肪變性ヲ起サシムルニヨルモノナラン(カル、テオドル候但シ網膜炎ノ劇否ハ腎臟疾患ノ輕重或ハ尿中蛋白ノ量ニ比例スルモノニ非ラズ經過モ亦之ニ等キモノニシテ腎臟炎増劇スルニ關セス網膜炎佳候ヲ呈シ或ハ之ニ反シテ腎臟炎輕快スルモ網膜炎充進スルヲアリ然リト雖モ蛋白尿性網膜炎ハ概シテ腎臟炎ノ豫後ニ於ル不良ノ徵候ト見做シテ不可ナシ何トナレバ網膜炎ハ偶々良性ノ經過ヲ取レル腎臟炎例之猩紅熱或ハ妊娠時ニ發スル一過性ノ症ニ於テ發スルヲナキニアラズト雖モ多クハ重症ノ慢性腎臟炎ニ併發スルヲ常トシ且ツ經驗ニ徵スルニ蛋白尿性網膜炎ヲ患フル者ハ大抵以下ニシテ腎臟病ノ爲メニ斃ル、モノナレバナリ

療法 主トシテ原因的療法ヲナシ發汗瀉下瀉血等ノ誘導法ヲ行フ

患者ノ既往症及ビ現症ヲ述ベン

患者

K、 B、 三十二才

石川縣能美郡ノ産農ヲ業トス

血族ノ關係 父ハ患者二十一歳ノ交五十八歳ニテ卒中症ニテ死シ母ハ幼時「コレラ」ノ爲メニ鬼籍ニ入リシト曰フ兄弟三人共ニ健在ス

天賦及ビ嗜好 生來健康ニシテ重患ヲ知ラス酒ハ一回量一合ニシテ好シテ喫煙シ茶ヲ嗜ム

本病々歴 一昨年三月頃淋疾ニ罹リ某醫ノ治療ヲ受ケシモ全治ヲ見ルニ至ラズシテ放置セリ

昨年十一月十五日頃ヨリ大ニ視力ノ障碍ヲ覺ヘ一迷ニ於テ漸ク物体ヲ辨別セリ同時ニ顔面及
 ヒ下肢ニ浮腫ヲ認メ頭痛頭重倦怠ノ感アリ昨年十二月金澤病院眼科部ニ來リ診療ヲ乞フ
 現症及ビ經過 患者來院當時ハ全身著シク浮腫シ殊ニ顔面上眼瞼ニ著明ニシテ尿量少ナク尿
 ハ暗赤色ヲ呈シ多クノ絮狀片ヲ有シ尿中多量ノ蛋白(〇、七%)ヲ含有シ尿意頻數アリタリ
 檢眼スルニ眼外部ニ變狀ナク左右共ニ乳頭ハ著シク充血シ混濁ヲ呈シ靜脈ハ充盈怒張シ動脈
 ハ狹少ナリキ

乳頭ノ近部及ビ諸所ニ大少種々ノ形ヲ呈スル出血点ヲ認メ左眼ニ於テハ黃班部ニ三角形ノ暗
 赤色ヲ呈スル周圍ヨリ本病ニ特有ナル星芒狀ノ混濁ノ放線狀ニ出ヅルヲ見ル右眼ニ於テハ尙
 明ナル星芒狀ノモノヲ黃班部ニ認メタリ

入院以來原因療法及ビ發汗療法ヲ行ヒ眼ニハ眼簾ヲ懸ケ置キシニ大ニ佳良ノ經過ヲ取り檢眼
 上白班及ビ出血班ハ著シク減少シ從フテ視力著シク恢復セリ

入院當時 右 6/24 左 1/60

現今 右 6/18 左 6/12 小孔眼鏡ニヨリテ共ニ6/9 トナリ尿中蛋白ハ初メ〇、七%
 ナリシモ〇、三%ニ減ゼリ(附患者ハ尙現今膀胱加答兒ヲ有シ金澤病院外科部ニ治療中ナリ)

金澤病院眼科五ヶ年間蛋白尿性網膜炎ノ統計

明治三十一年	六月	男	一	年齡	四十年以下
全	三十二年	十一月	女	男	一
全	五十年以下				

全	三十三	年	六	月	男	一	全	四十年以下
全	三十五	年	六	月	男	一	全	四十五年以下
全	三十六	年	五	月	男	一	全	四十五年以下
			十二	月	女	一	全	四十年以下

擱筆スルニ臨ミ恩師高安博士ノ本例ノ報告ノ快語ヲ與ヘラレタルヲ謝シ先輩伊野宮醫員ノ至大ナル示導ヲ得タルヲ謝ス(中島君ノ草稿ニ二三ノ改竄ヲ加ヘシノミ朝倉生)

雜 纂

○ 醫談片々 志蒙無良生

○ 醫士は例へ解りきつたる病氣でも 成べく叮嚀に診て遣るべしだとは、能く素人から注意されたことである。

あまり一寸見るのも不親切のやうではあるし、亦あまり輕卒な様で、患者の方から「アレにて解るだらうか」と思はるゝやうでも面白くない、殊に神經過敏性のものには左様である。ろれも無理はない、醫者の所へ来るやうだから、何しろ自分は大病人だと思ひ込んで居るのでは

あるまいか。▲田舎の老人などから能く聞かせらるゝは事、近頃の醫者は脈を診るのが大ぶオーケンになつたと言ふことだ。成程さうかも知れない、昔の漢方醫先生は只脈一つで萬病を診断したものだと言ふ話であるから確に叮嚀に診たものらしい。亦實際さう叮嚀に診る價值もあるだらうよ。

○ さりとて餘り長たらしく見て居るのも宜敷ない。解からぬから能く診るのか知らん」と、患者の方から思はるゝやうなことがあるまいか。▲田舎などよ開業した時には病院で遣るやうに直ぐ檢便檢尿などは出來難いものださうだ。病人に依りては「便の檢査せねば解らぬやうな